

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02535

研究課題名(和文) 世紀転換期から俯瞰するソフト・パワーとしての冷戦期合州国表象文化の研究

研究課題名(英文) US Culture (and Soft Power) of the Cold War era and Turn-of-the-Century Cultural and Political Issues

研究代表者

村上 東 (MURAKAMI, Akira)

秋田大学・教育文化学部・非常勤講師

研究者番号：80143072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：冷戦期を対象とする研究を深化させるため前後の時代を扱い、冷戦期に続く対抗文化期に関する論文集『ヒッピー世代の先覚者たち』を昨年刊行。冷戦期に先立つ二十世紀前半に関する論文集『メディアと帝国』の刊行準備をほぼ終えている。また大恐慌時代と冷戦期の関連に焦点を当てるシンポジウム「刻まれた断絶、忘れられた連続 プロレタリア期から冷戦を見直す」を日本アメリカ文学会全国大会で行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカ合州国が超大国(覇権国家)として世界に強い影響を与えるようになるのが冷戦期だが、その時代の合州国文化の問題を文化ナショナリズムと捉えることで政治との関係を整理し、日本を含む諸外国に及ぼす影響をソフト・パワーの概念を使い考察してゆく今までない方法論と問題意識を備えた研究である。同時に、冷戦期の政治が人文学に強い制約である作品論と地域研究に終始する従来の研究姿勢に対する反省を踏まえている。

研究成果の概要(英文)：To broaden (and deepen) our insight into the Cold War era, we have extended the research to its preceding and succeeding decades (the first half of the Twentieth Century and the Counterculture era). Last year, we published a collection of academic papers on the Counterculture: “The Forerunners of the Hippie Generation,” and another collection with its focus on turn-of-the-century issues, “The Media and the Empire,” is in good progress (due in 2020). And, to nurture a new perspective, last October at the annual convention of the American Literature Society of Japan we ran a symposium: “Forgotten (Dis)Continuity: Post-War North American Literature and the Proletarian Movement.” The discussions at this symposium form the basis for our next collection of papers.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：冷戦期 ソフト・パワー アメリカ合衆国 表象文化 ナショナリズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

今回終了し報告の対象となっている「世紀転換期から俯瞰するソフト・パワーとしての冷戦期合州国表象文化の研究」に先立つ基盤研究(C)「冷戦期合衆国表象文化(史)とナショナリズム/ソフト・パワーの関係性に関する研究」(平成26年~28年)において私たちは時系列で問題を整理する必要性を痛感し、冷戦期に先立つ二十世紀前半ならびに冷戦期とは明らかに別の方向へと表象文化(史)が動き出す対抗文化期(殊に前者に力点を置いて)をも守備範囲に入れる研究姿勢を打ち出した。

平成28年度日本英文学会全国大会シンポジウム「メディア、帝国、19世紀アメリカ」で今回の基盤研究の基本線を明らかにした。第二次大戦後(つまりは冷戦期である)強大なソフト・パワーを諸外国に対して行使するようになる合州国の表象文化だが、19世紀の段階ではその基礎工事と見做せるところはできあがっていても、摩天楼のようにそびえ立ち世界から仰ぎ見られてはいなかった(いや、国内においても自国文化は低く評価されていた)。ノーベル文学賞も1930年のSinclair Lewisが最初であるし、合州国ソフト・パワーの看板商品である映画は20世紀になってからの媒体である。つまり、20世紀前半に起こった変化が重要なのだ。研究対象とすべき時代区分に遡って世紀転換期を含めたのは、そうした歴史を踏まえることで冷戦期研究が豊かになること認めたためである。

2. 研究の目的

冷戦期合州国の表象文化は覇権国家のソフト・パワーとして、合州国国内のみならず、広く世界に強い影響力を持つものとなったが、その表象文化、文化ナショナリズムが急速に質的深化、量的拡大を示すのは世紀転換期からである。そうした圧倒的な文化の力を準備していた時期を精査することで、冷戦期文化研究に新たな視座をもたらすことが目的である。

表象文化の作品ではなくとも、例えば衣料品やコーヒー豆のような商品であっても、ソフト・パワーとしての側面を持ち合わせていよう。しかし、冷戦期合州国のソフト・パワーはその種類、量、影響力が桁外れであった。とはいえ、19世紀後半の段階では、合州国の知識人の多くが自国に超大国に相応しい文化があるとは考えていなかった。それが、第二次大戦後となると、世界の国々から留学生を呼び寄せるフルブライト奨学制度で国際的な研究教育交流分野に飛躍的な向上をもたらす。フルブライト奨学制度はほんの一例に過ぎない。世紀転換期から冷戦期に生じた変化は顕著なものであり、その過程と波及効果に少しでも明確な像を与え、納得のゆく説明をつけてゆくことが今回の目的であった。

3. 研究の方法

表象文化が政治的・社会的に機能する現象を、国内ではナショナリズムの欠くべからざる要素、つまり国にとっての文化資本として、また国外に対してはソフト・パワーとして捉えることで、表象文化史、表象文化研究を政治化・歴史化する。冷戦期合州国表象文化を準備した二十世紀前半また冷戦期以降の対抗文化も連続して精査することで、関連する諸問題を時系列に沿って解決することを目指す。そして、複数の分野=媒体(文学、批評、映像、音楽など)を分担して受け持つことで、表象文化(史)の全体像に近づく努力をする。

私たちの活動形態は、まず学会等で研究発表や講演をしたり、シンポジウムを実施することによって問題提起を行い、その後単著の論文あるいは問題意識を共有する複数の研究者を集めた論文集の刊行で成果をまとめる、というものである。平成21年度日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム「今一度冷戦を振り返って」を元に平成26年に論文集『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』(臨川書店、編著は代表研究者)を出版したが、その後も現在に至るまでこの活動形態を続けている。こうした活動により、研究分担者のみならず、研究対象や問題意識を共有するその他の研究者とも研究活動、研究成果を分かち合う方途を示している。言い換えれば、文科系の研究は個人の、孤独な仕事という固定観念を少しずつ変えていく努力を続けてもいるのである。この姿勢は今後も継続(今年度からの題目は「対抗文化期から遡行する冷戦期合州国表象文化(史)の研究」で研究代表者は尚絅学院大学の中山悟視となる)してゆきたい。

4. 研究成果

平成28年度日本英文学会全国大会シンポジウム「メディア、帝国、19世紀アメリカ」で今回の基盤研究の基本線を明らかにした。編集に手間取り予定より大幅に遅れたが、この時のシンポジウムを発展させた論文集『メディアと帝国』(小鳥遊書房、編集は塚田)を今年度刊行する。また、平成29年度日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム「対抗文化と伝統、対抗文化の伝統」は『ヒッピー世代の先覚者たち 対抗文化とアメリカの伝統』(小鳥遊書房、編著は中山)として昨年10月発売されている。

こうした学会における問題提起とそれに続く論文執筆、研究書出版による報告によって、冷戦期に先立つ<世紀転換期から第二次大戦までの時代>ならびに冷戦期に続く<対抗文化期から現代までの時代>を貫く問題系に従来とは異なる斬新な解釈を示している。

また、令和元年度日本アメリカ文学会全国大会で、私たちが実施したシンポジウム「刻まれた

断絶、忘れられた連続 プロレタリア期から冷戦を見直す」も二年以内の活字化を目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大田信良	4. 巻 128
2. 論文標題 ヴァージニア・ウルフ 『ダロウェイ夫人』と記憶 / ト라우マ論再考の可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大田信良	4. 巻 13
2. 論文標題 『読むことのアレゴリー』と倫理の問題 / 「エコノミーにおける転換	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 一橋大学大学院言語社会研究科2018年度紀要『言語社会』	6. 最初と最後の頁 40-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大田信良	4. 巻 13
2. 論文標題 ド・マン特集 序文「ポール・ド・マンを読むこと / 書くこと」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 一橋大学大学院言語社会研究科2018年度紀要『言語社会』	6. 最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大田信良	4. 巻 29
2. 論文標題 オクスフォード英文学とF・R・リーヴィスの退場 『グローバル冷戦』におけるポスト帝国日本の『英文学』とロレンス研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 D.H. ロレンス研究	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 21
2. 論文標題 『ライフ』・ナショナリスティック ヘミングウェイ、スペイン、ニューディール「南部」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フォークナー	6. 最初と最後の頁 108-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 46
2. 論文標題 ポスト帝国日本の「英文学」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 英学論考	6. 最初と最後の頁 19, 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 69
2. 論文標題 アサー・ミー、コドモ、ポピュラー・エデュケーションの価値	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 人文社会科学系I	6. 最初と最後の頁 71, 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良・大谷伴子	4. 巻 69
2. 論文標題 成長のアンチノミーとトランス・メディア空間 ポスト帝国のイングリッシュ・スタディーズ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 人文社会科学系I	6. 最初と最後の頁 83, 101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 50
2. 論文標題 「英語」学習とリーディングのちから	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 津田塾大学紀要	6. 最初と最後の頁 155-79; 231-32.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 12
2. 論文標題 Polluted but Beautiful—アトミック・ランドスケープの文化学	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本映画学会第12回大会プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 102, 111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 17
2. 論文標題 フリース・アメリカーヘミングウェイ、ロン・チャーニー、身体欠損—	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 外国語外国文化研究	6. 最初と最後の頁 1, 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 18
2. 論文標題 クロスメディア・ヘミングウェイ—ニューズリアル、ギリシア・トルコ戦争、「スミルナの棧橋にて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ヘミングウェイ研究	6. 最初と最後の頁 61, 70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 36
2. 論文標題 はじめに モダニティ論以降のポストモダニズム、あるいは、『大衆ユートピアの夢』を『ポスト冷戦』の現在において再考するために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヴァージニア・ウルフ研究	6. 最初と最後の頁 99-103.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 21
2. 論文標題 『ライフ』・ナショナリスティック ヘミングウェイ、スペイン、ニューディール「南部」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フォークナー	6. 最初と最後の頁 108-122.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Murakami Akira
2. 発表標題 Poet in a Double Bind: Tsujii Takashi and the Lost Tradition
3. 学会等名 Israeli Association for Japanese Studies Thematic Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』と記憶 / トラウマ論再考の可能性
3. 学会等名 世界文学会第2回連続研究会：『時代と文学』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 オクスフォード英文学こそがF・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件だったのか? 『グローバル冷戦』におけるポスト帝国日本の『英文学』とロレンス研究
3. 学会等名 日本ロレンス協会第49回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 “After New Criticism”の、あるいは、(再)制度化されたモダニズムの、『英文学』・批評理論 転換期・移行期としての『グローバル冷戦』
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山悟視
2. 発表標題 「わたしは機械でありたくない」; ヴォネガットのSF的想像力と人間性の探求
3. 学会等名 日本英文学会中国四国支部第71回大会シンポジウム「人間性の更新」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 “Framing/Filming Hemingway: Wartime Politics in To Have and Have Not ”
3. 学会等名 Hemingway in Paris: XVIII International Hemingway Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 “ Invisible Ethnicity: Faulkner and Garcia Marquez 's Mexican Connections ”
3. 学会等名 Faulkner and Garcia Marquez Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塚田幸光
2. 発表標題 ニューディール・クロスメディア スタインベックと「大衆」文化の政治学
3. 学会等名 アメリカ文学学会ワークショップ「Steinbeckとアメリカ民衆文化の想像力; 没後50年Steinbeck研究の現状と課題 (ジョン・スタインベック協会)」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田信良・大谷伴子
2. 発表標題 ポスト帝国の「英文学」とG・S・フレイザー 「現代的問題」としての「現代の英文学」の発明
3. 学会等名 日本ヴァージニア・ウルフ協会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 Smyrna Revisited: Hemingway and Cross-Media in the 1920s
3. 学会等名 Refiguring Ernest Hemingway in the 21st Century: A Symposium, (University of Tsukuba, Tokyo Campus) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 Danchi, Emperor, Terrorism: Nuclear Landscape in the Japanese Films
3. 学会等名 (Panel: Cinema and Catastrophe: Re-thinking Nuclear and Landscape) Knowledge/Culture/Ecologies International Conference, (Universidad Diego Portales, Santiago, Chile) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山悟視
2. 発表標題 オズ、サンタクロース、ユートピア
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東北支部
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山悟視
2. 発表標題 「禁書」としての『スローターハウス5』
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東北支部
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚田幸光
2. 発表標題 アメリカン・ニューシネマの政治学
3. 学会等名 関西学院大学秋季オープンセミナー「アメリカの政治と文化」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚田幸光
2. 発表標題 カウボーイとジェンダー アメリカ映画の性 / 政治学
3. 学会等名 文京学院大学大学院外国語研究科連携講座「映画を学ぶ、映画で学ぶ」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 塚田幸光	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 300
3. 書名 「「大衆」とフォト・テキスト;ニューディール、エイジー、文化の政治学」藤野功一編『アメリカン・モダニズムと大衆文学 時代の欲望 / 表象をとらえた作家たち』	

1. 著者名 塚田幸光	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 309
3. 書名 「ハイブリッド・エスニシティ;エドワード・ズウィック『マーシャル・ロー』と文化翻訳の可能性」塚田幸光編『映画とジェンダーエスニシティ』	

1. 著者名 塚田幸光	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪教育図書	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 「ドキュメンタリー・アメリカ ニューディールの文化生成と『怒りのぶどう』の政治学」中垣恒太郎・山内圭・久保田文・中島美智子編『スタインベックとともに 没後五十年記念論集』	

1. 著者名 中山悟視 (共著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 436
3. 書名 エコクリティシズムの波を超えて 人新世の地球を生きる	

1. 著者名 中山悟視	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 ヒッピー世代の先覚者たちー対抗文化とアメリカの伝統	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中山 悟視 (NAKAYAMA Satomi) (40390405)	尚綱学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究分担者	塚田 幸光 (TSUKADA Yukihiro) (40513908)	関西学院大学・法学部・教授 (34504)	
研究分担者	大田 信良 (OTA Nobuyoshi) (90233139)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	